

6—8			
主題	退院後の意欲低下やADL低下を防ぐ取組		
副題	その人らしい生活を取り戻すために		
日課表	意欲向上	研究期間	1 ヶ月
法人名	社会福祉法人府中西和会		
事業所名	特別養護老人ホーム 鳳仙寮		
発表者：谷合昭俊	アドバイザー：有馬樹里		
共同研究者：特養 2 階職員			
電 話	042-360-1353	FAX	042-360-1325
今回発表の事業所やサービスの紹介	2002 年 4 月開設。特養 50 床、ショートステイ 20 床、通所介護・介護予防通所介護 35 名、居宅介護支援事業所及び地域包括支援センターを併設する高齢者総合施設であり、小規模特養の特徴を活かし、温かく家庭的な支援をモットーに取り組んでいる		

《1. 研究前の状況と課題》

当施設 2 階フロアでは、重度高齢化がすすんでいる。入院する方もいて、退院後の廃用症候群の予防が必要であった。退院後も以前のように自分らしく生活していく為、支援する必要があった。

Y 様女性 90 歳。平成 23 年に入所される。

入院前は、新聞やニュースを見て時事について職員と話たり、クラブ活動に参加され、生け花や料理・書道などを楽しまれていた。生活にスケジュール立て、自立した生活をされていたが、体調を崩し食事摂取量が低下したことにより入院。退院後歩行の機能が低下し車椅子の生活となる。活気がなく消極的な発言が多く聞かれるようになった。その後毎日の歩行訓練や、好きな食べ物から提供し食事量を確保したことから、徐々に体力が回復される。食事量や ADL は入院前と変わらない様子だが、昼夜逆転傾向であり、意欲の低下が目立った。

居室で過ごすことが多く、日課のめだかのエ

サやりや、クラブ活動への参加もされず、居室に籠りがちであった。

「みんなに迷惑かけてしまって、前は自分でやっていたのに…」との発言あり、以前のように自立した生活を取り戻したいのではないかと、以前のような生活ができれば、活気が取り戻せるのではと考え、この目標に、取り組みを行った。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

以下のことを目的として取り組みを実施した。

- 日光浴や外出支援を行い、昼夜逆転の改善、他利用者との交流の場を設け、意欲的な生活を送る。
- 本人ができる事を、少しずつ実践して頂き、自信を持つことにより意欲の向上を図る。
- 以前の日課だったことができるように、声掛け援助し、生活のリズムを取り戻す。
- 居室が以前と違うため、環境整備を行い、事故なく、本人のペースで以前のような自

立した生活が送れる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- 1) 24 時間シートを使用し、現在の生活状態の把握、本人の様子を職員皆で周知する。
- 2) 以前の主の様子について、職員より情報収集を行い、主がどのように過ごしていたのか、主のその人らしさとはなんなのか改めて考え、以前の主の様子を理想と設定し、どのように近づけられるかを考察する。
- 3) 日中の過ごし方で「何をしたらいいかわからないの」と不安があった。そのため、24 時間シートで得られた情報を交えながら、フロアーの流れやクラブの予定表を書いた日課票を作成する。生活リズムの改善と日光浴の時間を決め、昼夜逆転の改善を促す。
- 4) 「外に出ると気持ちいい」「気分がいい」と話されており、外出支援に参加して頂き、他利用者との交流を図る。
- 5) 職員用に日課表に沿ったツールを作成する。そのツールにはスケジュールを伝えることができたか、自発的な生活を送る事ができたのか、どのような言動があったのか、書く欄を設け、確認出来るようにした。

《4. 取り組みの結果》

- 1) 24 時間シートを使用したことで、どの時間に活動的でどの時間に休まっているのか、職員がどのように関わっているのかを確認でき、職員がどのタイミングで関わる必要があるかが確認できた。
- 2) 日課表を本人と確認することにより、意欲の芽生えや自信につながった。
- 3) 昭和記念公園へ外出し、他利用者との外食を楽しまれ、笑顔多く見られる。外出後の夜間は、良く休まれておられ、一時的にはあるが、昼夜逆転が改善された。
- 4) 職員の声掛けが増えた事により、居室で食べられていた食事を、食堂にいられて召し上がる機会が多くなり、職員の声掛けにて、日課表のメダカの餌やりなどを職員と一緒に実

施される事が多く見られている。夜間帯の覚醒の頻度はあまり変化が見られておらず、トイレに行かれたり、散歩をされたりする。朝食後に、身体を動かす事が難しい様子あり、日課表の体操はあまり実施できないことが多かった。

《5. 考察、まとめ》

日課表に沿って、職員が声かけすることで、日中ベッド上で過ごされていた時間も減少し、日光浴や散歩、レクリエーションへの参加、他利用者との会話等が増えてきている。職員が声掛けをしなくても、ご自分で散歩されたり、食堂へ出てこられたりされ、活気が出てきているように思える。

夜間の覚醒時間が減少し、本人の排泄ペースで起きられる以外は、良く休まれており、昼夜逆転が改善傾向と思われる。

本人への声掛けでも、職員同士の気づきから、今日の予定を説明する声掛けにより、入浴の拒否の減少や、離床の拒否の減少につながり、気分の浮き沈みはあるが、意欲的な発言が聞かれるようになった。

本人の意欲的な発言から、そのひとらしい生活へつなげられるよう支援していく。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

研究前、ご本人とご家族に承諾をいただいた。また、内容を精査し、個人情報については削除や修正等の配慮を行った。

《7. 参考文献》

介護福祉士養成講座編集委員会著 2014 年「こころとからだのしくみ」、介護福祉士養成講座編集委員会著 2014 年「生活支援技術 1」。

《8. 提案と発信》

退院後も以前のように自分らしく生活していく為、支援するには、本人の意欲の向上が第一であり、その為には、その人らしさを考え、好きなこと、習慣などから、本人の自信を取り戻せるように支援していくことが必要である。